

# 国文学研究資料館蔵「うつほ物語絵巻」に描かれた住空間

——九州大学本との比較を中心として——

赤澤 真理

要旨 本論文は、国文学研究資料館蔵「うつほ物語絵巻」全五巻の絵画表現について、住宅の表現を手がかりに、九州大学図書館蔵「うつほ物語絵巻」全五巻との比較検討を通して、その特質を抽出する。資料館本は、うつほ物語の冒頭の俊藤を絵画化したもので、全二十八図からなる。源氏物語絵巻と比較し、近世においてうつほ物語を絵巻化した作例は少なく貴重である。資料館本及び九州大学本の相違を以下のようにまとめる。第一に、画面構成について、九州大学本は統一された画面に固定的な視点を採るが、資料館本は横長の画面に時間と空間の流れを示した連続的な表現である。第二に、場面選択について、九州大学本は絵巻としての華やかさを重要視したのに対して、資料館本は、臨終の場面や困窮した暮らしの様子、女と若小君の感動的な再会を繰り返し描くなど、物語内容を説明的に描くことを重視している。第三に、住宅の表現について、九州大学本は比較的古式の上流住宅の表現に絞られるのに対し、資料館本は上流から庶民までの階層の住宅を描いており、また同時代の別荘建築で使用された近世的な数寄屋風書院造など、多様な住宅表現が選択されている。九州大学本は、絵画表現において、虚構としての王朝世界を保とうとしたのに対して、資料館本は、近世における新しい、また多様な建築的要素を反映することで、当時の人々が理解のしやすい王朝世界を具体化したといえる。



## 一. はじめに

近世における人々は、古代の住宅をいかなる空間と理解し、絵画上に表現したのか。私はこれまでの研究において、源氏物語絵巻を中心とした古代王朝文化を主題とした物語絵巻を通して、近世の人々が思い描いた住宅に対する理解や理想像の分析を試みてきた。<sup>①</sup>

本論文は、国文学研究資料館蔵「うつほ物語絵巻」（以下、資料館本）について、九州大学附属図書館蔵「うつほ物語絵巻」（以下、九州大学本）との比較を通して、近世物語絵巻に示された住空間表現を検討する。<sup>②</sup>

端的に言えば、同じ江戸期に制作された「うつほ物語絵巻」において、古式的な要素を継承した九州大学本に対して、資料館本には、近世的な要素が投影された点を抽出し、両者の表現の相違を明らかにする。

うつほ物語は、平安時代中期に成立した長編物語であり、全二十巻からなる。近世において、平安時代に成立した物語を絵画化したものに、源氏物語絵巻、さらに伊勢物語絵巻がある。源氏物語絵巻及び伊勢物語絵巻は、小画面の色紙・絵巻から、大画面の屏風に至るまで多量に現存する。源氏物語絵巻は、物語が成立してから時を隔てずに絵画化が始まり、その後、中近世を通じて多量に制作された。源氏物語の絵画化には、物語本文を考証し、絵画化する方法と、年代に描かれた絵を参照し、それにアレンジを加える形で制作する方法があつた。<sup>③</sup>年代が降ると、後者の方法が大部分となる。伊勢物語絵巻もまた、近世に至るまで多量に制作された。この中で源氏物語絵巻が、狩野派・土佐派などの天皇家や幕府に仕えた御用絵師による絵が大半であるのに対し、伊勢物語絵巻は、現在には名がのこされていない絵師による絵画が数多く現存することに特徴がある。<sup>④</sup>これに対して、後に述べるように、うつほ物語を絵画化した作例は、

大変少ない。

## 二・国文学研究資料館蔵「うつほ物語絵巻」

源氏物語の絵合巻には、「白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり」と書かれたうつほ物語の絵画が登場し、うつほ物語の絵画化は、平安時代からはじめられたことが推測される。

現存する絵画としては、本論文が対象とする資料館本及び、九州大学本、九曜文庫本、天理大学天理図書館に二種の絵巻が現存するのみである。<sup>(5)</sup>このほか、冊子絵に、京都大学図書館本、早稲田大学図書館本、奈良絵本絵巻集所収本がある。<sup>(6)</sup>これらは、うつほ物語の冒頭の巻、俊蔭だけを絵画化している。

うつほ物語の絵画に関する研究は、中野幸一氏、安倍素子氏、田村隆氏による研究があるが、<sup>(7)</sup>描かれた絵画表現に関する研究は少ない。資料館本は、新収資料であることから、本論文ではその紹介を含め、九州大学本との比較を通して、絵画表現の特徴を明らかにしていきたい。

資料館本及び九州大学本には、絵師の記載がみられず、制作年代は不明である。田村隆氏は、九州大学本の詞書が、万治三年（一六六〇）年の絵入版本から抜粋されていることを明らかにされており、九州大学本を、寛文年間（一六六一年～一六七二年）制作と推測されている。<sup>(8)</sup>いっぽう、資料館本は、絵の筆致から九州大学本より新しいと推測され、詞書については巻三に錯簡があることから、古活字版、特にその第一種と近い関係にあることを指摘されている。本論文では、資料館本・九州大学本の制作年代について保留とし、両者の差異を描かれた表現を基に検討していきたい。<sup>(9)</sup>

### 三、近世物語絵に描かれた住空間表現

本論文は、うつほ物語絵巻に描かれた住空間に着目する。うつほ物語は平安時代を主題とした物語であるが、絵巻はそれよりも六百年が降った、江戸時代に制作された。資料館本には、いつの時代のどのような住空間が描かれているのだろうか。以下の二点を想定してみよう。

①うつほ物語は、平安時代を主題とした物語であることから、江戸時代に制作された絵画であっても、平安時代の住宅の様相が描かれる。

②当初は平安時代の住宅の様相で描かれていたが、時代が降り、江戸時代においては、平安時代の住宅が理解できなくなり、絵には制作当時の住宅様式が混ざりこむようになる。

私はこの点を明らかにするために、源氏物語絵に描かれた住空間表現の変容過程を検討してきた。源氏物語絵は物語五十四巻の一・二場面を選択し、絵画化したため、同じ場面で描かれた絵を編年的に比較することで、描かれた住空間表現の年代による変容過程を明らかにすることが可能となる。

#### 三―一、日本住宅の変遷

日本住宅の歴史について、簡単にふれておこう。<sup>(10)</sup>日本の上流住宅には、寝殿造と書院造という大きな二つの様式に大別されている。寝殿造の空間は、母屋という中央の柱に囲まれた空間（五間～七間×二間）に、母屋の四周を取り

囲む廂の空間（幅一間）が接している。基本的に固定的な仕切りはなく、非常に開放的なワンルームの空間である。柱は丸柱で、床は板敷に、寝る所、座る所に座布団のように、畳を置いた。

年代が降り、生活の変化に従って、寢殿造の空間は建具によって、細かく仕切られるようになる。応仁の乱の後に、書院造が定着してくる。母屋・廂の区別を無視して、建具で部屋を細かく分断し、建具の納まりがよいように、柱は角柱となる。畳も同じ寸法で規格化されていき、床に敷き詰められるようになる。また、床・棚・書院・帳台構などの座敷飾りが固定化する。現在の和室の原型が、室町時代後期頃に成立した。

十二世紀に描かれた国宝源氏物語絵巻に描かれた住空間を見ると、柱は丸柱で、戸外と接した簀子に高欄という手摺りがついた寢殿造の様相が描かれている。高欄は、後の書院造では省略された。

また、寢殿造の全体像を確認すると、寢殿を中心に、対が接し、泉殿等が付属するという構成である。東及び西の門から入り、中門廊という玄関を通過する。「年中行事絵巻」「駒競行幸絵巻」などの平安から鎌倉時代に制作された絵巻を見ると、門から中門廊、対、寢殿と連結した寢殿造の全体像を確認することができる。

寢殿造の空間は、時代が降り、書院造へと変化する。近世的な書院造の先駆的な遺構といえる、滋賀県にある園城寺の光浄院客殿（一六〇一年）には、江戸城などの御殿にみられる床・棚・帳台構えをそなえた平面を確認することができる。初期の書院造の全体像は、京都の都市を主題とした屏風である、上杉本洛中洛外図屏風の細川殿として描かれている。

ここで、建物の配置を見ると、寢殿造の空間は、基本的に一つの殿舎に儀式を行う空間と日常生活の空間が混在していた。いっぽう、近世になると、「一殿舎一機能」という言葉に示されるように、一つの建物が一つの機能に限定されるようになり、機能と身分階層に従って、建物が奥へと建設されるようになる。江戸城によって知られている、

表・中奥・大奥というゾーニングである。

この際、建物の表向の空間は、金碧の障壁画で仕切られた絢爛豪華な様相であるのに対し、奥向の空間には、数寄屋風書院造と定義された。金碧の替りに墨で描いた水墨画や唐紙を貼った襖障子が使用され、座敷飾りの意匠も自由に装飾的になる。

数寄屋風書院造は別荘建築に採用された。その代表的事例としてあげられるのが、京都の桂川のほとりに建つ桂離宮である。十七世紀前半に、八条宮智仁・智忠親王が、源氏物語の世界に憧れを持って造営した別荘である。竹の材を使用した縁側など、自然が感じられる意匠になっており、市松模様の唐紙障子など、書院造の格式からは自由な造りとなる。

### 三―二・源氏物語絵に描かれた住空間の変遷

このような日本住宅の流れをもとに、源氏物語絵に描かれた住空間をみていこう。橋姫巻の宇治の山里で、薫が透垣の隙間から姉妹を垣間見る場面をとりあげる。本図様は、十二世紀に制作された国宝源氏物語絵巻から、十七世紀に至るまで、透垣の隙間に立つ薫と室内にいる姉妹の図様が継承されてきた。<sup>①</sup>

ここで描かれた住空間表現をみてみよう。十二世紀の国宝源氏物語絵巻は、丸柱であり、室内には襖や調度のない、簡素な寝殿造の空間である。その後、十七世紀の土佐光吉の周辺で描かれた源氏物語絵になると、室内に華やかな金の几帳が登場する。さらに、十七世紀の半ばに土佐派から分派した住吉具慶の源氏物語絵には、前述した桂離宮にみられる、唐紙障子などの数寄屋風書院造の要素が混在するようになる。

源氏物語絵は、一定の図様を継承したが、そこに描かれた住空間は、絵の鑑賞者達の上流住宅に対する共通理解に基づいて、絵に選択された様相は、変化していった。そこには、それぞれの絵画を共有した当時に理想とされた上流住宅像が示されていると考えられる。

#### 四．資料館本に描かれた各場面

以上の前提をふまえ、本論文では、うつほ物語絵巻に描かれた住空間表現について、九州大学本との比較を踏まえ、その特質を抽出する。資料館本の全五巻を確認していきたい。

巻一（一）容姿が美しく才学の優れた俊蔭は、遣唐使船の使いに任命された。父母の悲嘆は限らないものがあつた。描かれた建物は、左近の桜、右近の橘が咲いており、内裏の紫宸殿である（図一）。

巻一（二）俊蔭の遣唐使船は嵐に遭遇し、波斯国に漂着する。俊蔭は、梅檀の木の蔭で、七弦琴を弾く三人と出会う。ゴツゴツした山の表現によって、異国を表している（図二）。

巻一（三）俊蔭は険しい山に辿り着くと、桐の太木を切り、細工をしている者たちと会う。俊蔭は阿修羅に対して、父母に聞かせる琴を作る木を分けてほしいと頼む。この阿修羅の顔貌表現には、異形（資料館本）と人間（九州大学本）の系譜があり、田村隆氏の研究に詳しい<sup>⑫</sup>（図三）。

巻一（四）三年目の春、俊蔭は、音色の優れている二つの琴を弾いていると、春の日に大空から紫の雲に乗った天人が降りてくる。天人は二つの琴に「なん風」「はし風」と名付けて、山の奥にいる自らの七人の子から、秘曲を弾き取り、日本に戻るよう伝える。桜が咲き、遣水が流れ、紫の雲にのった七人の天女が描かれている（図四）。



巻一（五）花園から西を目指す大きな河があり、険しい山が七つ、それぞれ七人の仙人が住んでいた。画面は、七番目の山の風情を示すものと考えられる。蓮の花・紅葉、鳳凰・孔雀、七人の仙人が描かれている（図五）。

巻一（六）俊蔭は西に向かい、七人の仙人と琴を弾いていると、文殊を引き連れて仏が出現する。俊蔭は、三代目の孫に仙人の子孫を得て、その者は、果報も豊かであろうと予言をつけられる。仏を中央に両側に文殊菩薩を引き連れている（図六）。

巻二（一）日本へ帰ろうとする俊蔭は、波斯国の帝と后と皇太子に琴を献上する。色鮮やかな建築は、異国をあらわす表現である。壁には、波の絵画が描かれている（図七）。

巻二（二）俊蔭は三十九歳で日本に帰国し、帝・皇后などに、持ち帰った琴を献上する。縹緗縁の置畳に座り、顔を隠しているのが帝である。室内には漢画が描かれている（図八）。

巻二（三）俊蔭は官位を返上し、京のはずれにある京極の大路あたりに、広大で風流な邸を造って、生まれた女に秘琴を習得させる。女の琴の音は父にも勝る。青の唐紙障子・水墨画・竹で造った高欄・遣水・前栽などを描き、風流な邸を表現している（図九）。

巻二（四）女が十五歳の時に、母が亡くなり、父・俊蔭も病となる。俊蔭は、女に二つの秘琴を託し、大きな災難の際には、琴をかきならすように、そして子供が優れていた際は、琴を譲るように遺言する。横たわるのが俊蔭で、水墨の屏風が置かれている。また、描かれた唐紙障子は、波紋であるが、誕生や臨終場面を選択されることが指摘されている（図十）<sup>(13)</sup>。

巻二（五）俊蔭亡き後、貧しくなった女は、乳母が使っていた傭と暮らしていた。邸宅は通りがかりの人々が壊して盗んでいったので、寝殿がただ一つのこっているのみでそこに暮らしていた。八月頃、太政大臣の賀茂社参詣に、

十五歳の四男・若小君が邸宅前を通りかかる。荒れた邸の垣根から尾花を手折ろうとすると、女君の姿が見えた（図十一）。

卷二（六）若小君は俊蔭女の邸を秋の夕暮れに訪れる。中では女が琴を弾いている。若小君は女君に素性を訪ねた。簀子が崩れ、門の屋根が失なわれている。杉戸には犬が描かれている（図十二）。

卷三（二）太政大臣の邸では、若小君が行方不明となり大騒ぎとなり、兄は叱られ、下男も折檻される。その後、若小君は両親に厳しく監視され、俊蔭女のところを訪問することができなくなる。奥の空間に太政大臣達、杉戸を隔てた空間に下男達がいる（図十三）。

卷三（二）俊蔭女は若小君の男の子を出産する。柴垣に囲まれ土壁の鄙びた住居で姫の助けのもとに出産している（図十四）。

卷三（三）姫は、瑞夢を見て、それを女に聞かせて励ます。針に、縹色の糸を通したものを、はしたかがくわえて、姫の前に落とした。その針を行者が女の衿に縫い付けた。はしたかは、針を探す様子で袖にとまり一向に飛び立たないという。土壁の住まいに、竹の縁側が描かれる（図十五）。

卷三（四）子が五歳になると姫は亡くなった。母子は食糧がなくなり、子は、川から魚を釣って、母親に食べさせる。釣ってきた魚はたちまち百味を備えた食物に変わった。画面では、亡くなったはずの姫の姿が描かれているのは誤解であろうか。桐紋の唐紙障子が描かれている（図十六）。

卷三（五）仕えていた姫が亡くなり、俊蔭女と男の子（仲忠）が遺される。仲忠は、母のため、山で食料を求める。山深いところに非常に大きな杉の木が四本、重なり立っていて、大きな部屋くらいの空洞になっていた。恐ろしそうな熊が住んでいたが、子の母思い話に、熊は情愛を悟り、うつほを譲る（図十七）。

卷三（六）母子は食料を求めて、山に移り住んだ。うつほの周りを掃除すると、きれいな泉が湧いてきた。母は子に琴を奏でると、熊・狼・猿が琴の音に感激して、木の実を持ってきた。長い画面を使って、動物達が山の手前から奥のうつほへと駆け出してくる様子を表現している（図十八）。

卷四（二）東国から四、五百人の武士達がやってきて、山を荒らした。女は父の遺言を思いだして、なん風の琴をかき鳴らす。大木が倒れ、山が崩壊し、武士達の多くが亡くなり、山は静かになった。ここでも絵巻の長い画面によって武士達の進行と山の奥の女と仲忠を表現している（図十九）。

卷四（二）帝が北野社に行幸する日に、かつての若小君・右大將が、山の奥に琴の音を聞いて、進んでいく。そこで、右大將は仲忠に会い、身の上の事情を聞き、自らの子供であることを知る（図二十）。

卷四（三）右大將は、仲忠に山を出て京へ行くことを勧め、それを母に伝える。猿が六、七匹連れ立って葉をお椀のようにして、椎・栗・柿・梨・芋・野老などを入れて持っている（図二十一）。

卷四（四）右大將は、住まいを用意したので、子の将来のためにも、京へ戻るように説得する（図二十二）。

卷四（五）右大將の説得により、女と子は京へと戻る（図二十三）。

卷五（一）子供が十六になった年、元服をして仲忠と名をつけ、帝も東宮も常に仲忠をそば近くに置いた。卷一（二）と近似した表現であるが、桜・橘は描かれていない。（図二十四）。

卷五（二）三条堀川の邸に迎えられた俊蔭女達。年配の女房二十人ばかり仕えさせる。従者たちも大勢集めて仕えさせる。手前の青の唐紙が貼られた部屋に従者達、杉戸を隔てた奥の建物には水墨画が描かれ、中央の几帳に囲まれた所に、俊蔭女がいる。州浜台には松が添えられ、本絵巻に象徴的な祝賀的な場面である（図二十五）。

卷五（三）八月二十二日、兼雅邸で相撲の還饗。御前に砂子をまかせ、前栽を植えさせ、寝殿の南の廂に座席をし

つらう。上達部、親王の前には紫檀の机に綾の布の覆い。中将、少将の前には、蘇芳の机が置かれる。絵には、それぞれの机が描かれている。実際には上達部・親王、中将・少将の座は区別されていたであろうが、絵では同座している。室内には、竹・鳥の水墨の障壁画が描かれている（図二十六）。

卷五（四） 仲忠は、母から琴を習得し帝の前で披露する。皆、涙を落として心から感動する（図二十七）。

卷五（五） 兼雅邸での相撲の還饗にて、左大将の娘を褒美に仲忠が琴を弾く場面である。庭で相撲をする人々、中央で琴を弾く仲忠、御簾の奥から琴の音を聞く女性達が描かれている。表の仲忠の室は水墨の漢画、女房達の室には青の桐紋の唐紙が描かれている。本絵巻では、水墨の漢画と青の唐紙によって、部屋を区別していることが分かる（図二十八）。

## 五．資料館本に描かれた絵画表現の特質―九州大学本との比較から

資料館本は全二十八図にわたって、濃彩金地を使用して描かれた華麗な絵巻である。ここで、九州大学本と比較し、資料館本の特質を抽出する。

### 五―一．画面構成

まず、画面構成について、九州大学本が固定的な表現といえるのに対し、資料館本は、連続した表現を用いていることに特徴がある<sup>〔14〕</sup>。

俊蔭女と子に、動物達が木の実を持ってくる場面では、九州大学本は、統一された大きさの画面を使用し、俊蔭女・子、動物達がいる固定的な画面といえる。<sup>15</sup> いっぽう、資料館本は、横長の画面に動物たちが走り出してくるようになってゐる（巻三（六）、図十八）。資料館本には、時間と空間の動きが示されている。

邸に迎えられた俊蔭女・子の場面でも九州大学本は、統一された大きさの画面を使用し右大将、俊蔭女がいる固定的な画面である。いっぽう、資料館本は、邸宅の表側にいる従者達、邸宅の奥に座る俊蔭女達を一画面に描き出しており、横長の画面に、邸宅の表から奥への、時間と空間の流れが表されている（巻五（二）図二十五）。

絵巻の最終段にあたる、相撲の還饗において、仲忠が琴を披露する場面でも、庭で相撲をする人々、琴を弾く仲忠、御簾の奥の女房たちの三つの空間が示されている（巻五（五）図二十八）。これに対して、同じ場面を描いた九州大学本、あるいは九曜文庫蔵の絵巻も固定的な表現となっている。資料館本は当初から絵巻として制作がなされたのに対し、九州大学本は、冊子や版本の挿絵に近いといえよう。

## 五―二．場面選択

続いて、九州大学本、資料館本に示された場面選択を検討する。九州大学本が、物語中の華かな場面を重要視したのに対して、資料館本は、物語内容を説明的に描くことが重要視されている。

俊蔭女が子を出産する場面では、九州大学本は物語内容に反して、多くの女房たちに囲まれて、豪華な様相が示されている。いっぽう資料館本では、姫に見守られ、出産する様相が描き出されている（巻三（二）図十四）。

資料館本は、姫に助けられて寂しく出産した物語の内容をよく表現しているが、九州大学本は女性の出産の祝賀的

な雰囲気<sup>(16)</sup>が示されている。これは九州大学本が婚禮道具として制作された背景による可能性がある。加えると、万治三年の版本では、藁葺の農家に沢山の人たちに囲まれて出産する様相となっている。

また、右大將がうつほに住む母子を迎えにくる場面では、九州大学本は、右大將が俊蔭女・子のために、桂や袴を持って迎える図となる。九州大学本は一場面に凝縮し、桂や袴を描き、感動的な場面を豪華に演出することに重点が置かれている。

いっぽう、資料館本では、右大將と女が子供を介して再会し、山を降りるまでの過程を、四図の絵を使って、丁寧に表現している。①山の手前にいる右大將と子供、山奥に居る女(巻四(二) 図二十)、②子は母に話を伝える(巻四(三) 図二十一)、③右大將は女を説得する(巻四(四) 図二十二)、④右大將と女と子は山を下りる(巻四(五) 図二十三)。

資料館本は、右大將と女の感動的な再会を、四つの図を使って、丁寧に繰り返し描きだしている。そこには、見ための華やかさではなく、俊蔭女の心の動きを、説明的に表現している。

また、資料館本は華やかとはいえない、俊蔭臨終の場面(巻二(四) 図十)、嫗と俊蔭女が針仕事をする貧しい暮らしが選択されている(巻三(三) 図十五)。九州大学本が十八図、資料館本が二十八図と絵の数に規定される要因もあるものの、資料館本は、物語を説明的に表現することに重点を置いている。

### 五―三、住空間表現

さらに、住空間の表現を検討する。九州大学本が比較的古式の様相で、全体に統一された邸宅表現であるのに対し

で、資料館本は、近世的な様相が混在し、さらに庶民や貴族などの多様な階層の住宅が登場することに特徴がある。

俊蔭が日本に戻り、帝に琴を献上する場面では、両者ともに、縹緗縁の畳の縁に座る帝が描かれている。この中で、九州大学本は、板敷であり、比較的古式の平安時代の寝殿造の様相であるのに対して、資料館本には、畳が敷かれ、水墨画の障壁画という室町期から登場し、近世に隆盛した要素が混在する（巻二（二）図八）。このように、資料館本は、うつほ物語という平安時代の物語を題材としながらも、絵が描かれた当時の近世的な要素を選択し、住空間を描いていることが分かる。

俊蔭が京のはずれの京極大路に風流な邸宅を造営し、女に琴を教える場面では、九州大学本は、古代寝殿造の黒塗の部戸、近世書院造の水墨の襖障子と、古代の要素と近世の要素が混在する。平安時代における古代寝殿造の様相を描こうとしたものが、同時代の近世的な建築的要素が混ざりこんでいる。

資料館本には、青の唐紙障子や竹で造られた高欄など、一層近世的な要素が強く混ざりこむ。さらに詳細に画面を検討すると、資料館本に描かれた青の唐紙障子や竹で造られた高欄などは、近世の別荘建築で使われた要素であり、資料館本は、物語に書かれる京のはずれにある風流な邸宅を、近世における別荘建築を援用し、表現している（巻二（三）図九）。

九州大学本に登場する住宅は、上流住宅の格式ある表現に絞られているのに対して、資料館本には、上流から庶民までの多様な階層の住宅表現が示されている。俊蔭女が出産する場面では、九州大学本は、風喰がみられるものの、黒塗の部戸という平安時代の寝殿造に使用された格式の高い建具が描かれている。

いっぽう、資料館本は、土壁・板葺屋根・芝の垣根で構成され、俊蔭女が嫗とともに叙しく出産した場面を、格の下がる住宅によって示している（巻三（二）図十四）。このように資料館本には、上流住宅とは異なる、中下層の階

層の住宅が登場することに特徴がある。

土壁・板葺の屋根などは、俊蔭女と嫗が貧しい暮らしの中で、針仕事をする場面にもみられる。実際には貧しくありながらも、貴族住宅に住んだことが推測されるが、資料館本では、土壁の庶民の住宅の表現となる。

## 六．おわりに

最後に、日本へ帰ろうとする俊蔭が、波斯国の帝と后と皇太子に琴を献上する場面を検討する。異国の住宅は、土足で生活する土間に、瓦屋根と漆喰壁で構成される様相であり、中国建築の様式といえる。これに、色鮮やかな彩色を施すことで、近世の絵師たちは、異国風の建築を表現した。

九州大学本及び資料館本の表現は、屋根瓦・石畳・前栽の松など、両者は近似した様相である。近世において、絵師や鑑賞者たちの異国に対するイメージは、比較的画一的であり、典拠とする画像は少なかったため、共通の祖本をもとに描いた可能性がある。

いっぽう、日本を舞台とした住宅においては、九州大学本は比較的古式で統一された住宅表現であるのに対して、資料館本は、京の郊外にある風流な住宅に同時代の別荘建築の要素を、貧しい暮らしを庶民住宅の要素で表現した。

九州大学本は虚構としての王朝世界を保とうとしたのに対して、資料館本は、近世における新しい、また多様な建築的要素を反映することで、当時の人々の理解のしやすい王朝世界を具現化し、鑑賞者の共感を促したと考えられる。以上より、資料館本「うつほ物語絵巻」には、近世の人々が共有したうつほ物語の世界が示されていると位置づけることができる。<sup>17</sup> 資料館本は、近世において王朝物語を詳細に絵画化した貴重な作例といえるのである。



注

(1) 赤澤真理『源氏物語絵にみる近世上流住宅史論』中央公論美術出版、二〇一〇年。

(2) 本論文は、「国文学研究資料館通常展示物語そして歴史 記念講演会」田村隆「奈良絵本と板本―『うつほ物語絵巻』の場合―」・赤澤真理「『うつほ物語絵巻』に描かれた世界―住空間表現を中心として」(於…国文学研究資料館 大会議室、二〇一一年一月二十四日)における内容を基にまとめた。当日講師を務めた田村隆先生、中村康夫先生、吉田小百合氏、このほかにご教示をいただいた皆様に心より感謝申し上げます。

「国文学研究資料館通常展示 物語そして歴史」(二〇一一年一月二十四日～三月十一日)の展示においては、資料館本・九州大学本各五巻の展示がなされた。

(3) 秋山光和「源氏絵」日本の美術一一七号、至文堂、一九七七年。『豪華源氏絵の世界源氏物語』学習研究社、一九九九年。田口榮一「源氏絵の系譜―主題と変奏―」所収。『源氏物語の絵画』堺市博物館、一九八六年。榊原悟「住吉派『源氏絵』解説―附書本詞書―」サントリー美術館論集三号、サントリー美術館、一九八九年等が至便である。

(4) 伊藤敏子『伊勢物語絵』角川書店、一九八四年、『伊勢物語絵巻絵本大成』羽衣国際大学日本文化研究所編、角川学芸出版、二〇〇七年が至便である。

(5) 九州大学附属図書館本(絵巻) 五巻、国文学研究資料館本(絵巻) 五巻のほか、九曜文庫本(絵巻) 三巻、天理図書館久原文庫本・西荘文庫本(絵巻) 各五巻がある。資料館本の請求番号は、九九―一四三―一〇五。箱裏には、「正筆 八條宮智仁親王うつほ物語五巻」とある。詞書は、金に草花の料紙。絵は、金銀泥極彩色画。

三三・二cm×十三m七十cm×十六m六十三cm。

(6) 京都大学図書館本(冊子) 五冊、奈良絵本絵巻集三巻所収(冊子) 十冊、奈良絵本絵巻集八巻所収(横本) 五冊、奈良絵本絵巻集別二巻所収(冊子) 五冊、万治三年絵入本三冊等がある。

(7) 中野幸一「うつほ物語の絵詞とうつほ物語絵巻」早稲田大学教育学部学術研究…人文・社会・自然、十号、一九六一年、同『うつほ物語の研究』・『うつほ物語資料』武蔵野書院、一九八一年、同編『奈良絵本絵巻集三うつほ物語』早稲田大学出版部、一九八八年、同編『奈良絵本絵巻集八うつほ物語(二)』早稲田大学出版部、一九八八年、同編『奈良絵本絵巻集別巻二 武家繁昌(二) うつほ物語(三)』早稲田大学出版部、一九八八年、安倍素子「延宝版『うつほ物語』の「絵」について(一)」「(三)」尚綱学園研究紀要A 人文・社会科学、二〇〇七年～二〇〇九年、同「奈良絵本絵巻『うつほ物語』について(一)(二)」万治版への影響」尚綱大学研究紀要、二十八・二十九号、二〇〇六・二〇〇七年。京都大学附属図書館所蔵奈良絵本コレクション宇津保物語 <http://edb.kuilib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/n43/index.html> 田村隆「奈良絵本『うつほ物語』の背景」文学、九一四、二〇〇八年、田村隆・今西祐一郎「うつほ物語絵巻解説」[https://qir.kyushu-u.ac.jp/info/lib2/rare2/kaisetsu/utsuho\\_emakim.html](https://qir.kyushu-u.ac.jp/info/lib2/rare2/kaisetsu/utsuho_emakim.html)

(8) 田村隆氏は資料館本の詞書について次のように分析をしている。「資料館本の本文は巻三に錯簡がある。俊蔭女の出産が近づく場面、本来は「されどなをさあるにこそあらめ、とてもかくても覚えず、と言へば、……」と続くべきところで「あらめ」の後の千字余りが脱落し、しばらく後にある「我すくせの」の後に入り込んでいる。そのせいで、絵巻の本文は出産がすんだ後で媼が出産時期を案ずるといったちぐはぐな記述になっている。この錯簡は古活字版(二冊、俊蔭巻のみ)にも存し(上巻三五丁裏～三八丁表)、両者の密接な関係が窺える。絵巻の本文は古活字版、特にその第一種(川瀬一馬『古活字版の研究』の分類による)によったものと思われる。

る。俊蔭をしばしば「年影」と表記する点も古活字版第一種と共通する。第一種本によったとおぼしい絵巻としては、他に天理図書館旧久原文庫本が挙げられる。」（『国文学研究資料館通常展示 物語そして歴史』（二〇一一年一月二十四日～三月十一日）の展示解説から抜粋させていただいた）

（9）箱書には伝八条宮智仁親王筆とあるが、伝承の範囲と考えられる。伝承の範囲と考えられる。

（10）『日本建築史図集』（新訂第二版）（彰国社、二〇〇七年）等が至便である。

（11）『豪華源氏絵の世界源氏物語』学習研究社、一九九九年を参照されたい。

（12）『国文学研究資料館通常展示 物語そして歴史 記念講演会』（於：国文学研究資料館大会議室、二〇一一年一月二十四日）における田村隆氏の講演に詳しい。

（13）今倉智美・波多野純「唐紙障子の成立と文様の意味」『研究報告集Ⅱ 建築計画・都市計画・農村計画・建築経済・建築歴史・意匠』日本建築学会関東支部、二〇〇六年。

（14）絵巻物には、「連続式」と「段落式」の定義があり、連続式に「信貴山縁起絵巻」、段落式に国宝「源氏物語絵巻」があげられることが多い。秋山光和『日本絵巻物の研究上・下』中央公論美術出版、二〇〇〇年等。資料館本は連続式、九州大学本は段落式に分類ができる。また、九州大学本の絵画は統一された料紙を使用しており、その表現は冊子絵に近い。

（15）九州大学本の絵画部分は、統一された寸法の料紙を使用している。

（16）九州大学本の制作背景は、注7の田村隆氏の紹介によると、肥後熊本藩の支藩宇土細川家の旧蔵書である。

（17）資料館本に示された住空間表現の多様化、近世的な様相の投影は、江戸前期の物語絵巻の特徴の一つと考えられる。例えば、近年注目を集めている石山寺・ニューヨーク公共図書館他蔵「源氏物語絵巻」においても、近世

的な書院造の表現が強く投影されている。江戸後期になると、復古大和絵の隆盛から、歴史考証に基づいた復古的な建築表現が定着するようになる。ただ江戸前期においても、歴史的な考証がなされなかった訳ではなく、やまと絵画派である土佐派や住吉派では、部分的に寢殿造の考証が試みられた（注1を参照）。しかし土佐派や住吉派の絵においても復古的な要素と近世的な要素が混在した。総合的には、江戸前期は、描かれた住空間表現が多様化した時期といえる。今後の課題としていきたい。

# 「うつほ物語絵巻」（国文学研究資料館蔵） 場面一覧

図 6	巻 1	6	資料館本	九州大学本
図 5	巻 1	5	容姿が美しく才学の優れた俊蔭は、遣唐使船の使いに任命される。父母の悲嘆は限りない。	
図 4	巻 1	4	俊蔭の乗った遣唐使船は暴風にあい、波斯国に漂着した。梅檀の木の蔭で、七弦琴を弾く三人と出会う。	●
図 3	巻 1	3	俊蔭は険しい山に辿り着くと、桐の太木を切り、細工をしている者たちと会い、父母に聞かせる琴を作る木を分けてほしいと頼む。	●
図 2	巻 1	2	三年目の春、西の花園に移って、音色の優れている二つの琴を弾いていると、大空から紫の雲に乗った天人が降りてきた。	
図 1	巻 1	1	花園から西を目指す大きな河があり、険しい山が七つ、それぞれ七人の仙人が住んでいた。	
図 0	巻 1	0	俊蔭と仙人が琴を弾いていると仏が現れる。俊蔭は、七番目の仙人の子孫を三代目の孫に得ると予言をつけられる。	

図 17	図 16	図 15	図 14	図 13	図 12	図 11	図 10	図 9	図 8	図 7
巻 3	巻 3	巻 3	巻 3	巻 3	巻 2	巻 2	巻 2	巻 2	巻 2	巻 2
5	4	3	2	1	6	5	4	3	2	1
子は、山深い所の大きな杉の下にうつほをみつける。恐ろしい熊が住んでいたが、母思いの話に熊は情愛を悟りうつほを譲った。	子が五歳になると姫は亡くなった。母子は食べるものがなくなり、子は、川から魚を釣って、母親に食べさせる。	俊蔭女・子・姫が裁縫をしている。姫の瑞夢の話か。	俊蔭女は若小君の子を懐妊をし、老女は万端にあれこれと用意をする。6月6日に俊蔭女が男児を出産した。	太政大臣の邸、若小君が行方不明となり大騒ぎ。兄は叱られ、舎人や雑役の下男も折檻される。	素性を訪ねる。 若小君は俊蔭女邸を秋の夕暮れに訪れる。中では女が琴を弾いている。若小君は女君に素性を訪ねる。	俊蔭亡き後、女は、寝殿が一つ、簀子も朽ちてなくなった状態で住んでいた。亡き乳母が使っていた下女の老女を使っていた。	女十五歳の時に、母が亡くなり、父・俊蔭も病となる。なん風・はし風、二つの秘琴を託す。	俊蔭は官位を返上し、三条の末、京極の大路あたりに、広大で風流な邸を造って、女に秘琴を習得させる。	俊蔭は三十九歳で日本に帰国する。帝・皇后・東宮・東宮の女御・右大臣・左大臣に、持ち帰った琴を献上する。	日本へ帰ろうとする俊蔭は、波斯国の帝と后と皇太子に琴を献上する。
●	●		●		●			●	●	●

図 28	図 27	図 26	図 25	図 24	図 23	図 22	図 21	図 20	図 19	図 18
巻 5	巻 5	巻 5	巻 5	巻 5	巻 4	巻 4	巻 4	巻 4	巻 4	巻 3
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	6
兼雅邸での相撲の還饗において、左大将の娘を褒美に仲忠が琴を弾く。源仲頼と良岑行政も琴を調べ合わせる。	仲忠が五節の舞の夜に、帝の御前で、せた風を弾き鳴らす。人々、涙を落として心から感動する（仲忠が琴を弾く前の回想か）。	八月二十二日、兼雅邸で相撲の還饗。御前に砂子をまかせ、前栽を植えさせ、寝殿の南の廂に座席をしつらう。	三条堀川の邸にいる右大将、俊蔭娘、仲忠。年配の女房二十人ばかり、下仕えなど大勢集めて仕えさせる。	子供が十六になった年、元服をして仲忠と名をつけた。従五位を賜り、昇殿させ、帝も東宮も常にそば近くに置いた。	母子は、山を降りる。明け方に三条の大路よりは北、堀川よりは西にある邸に着いた。	右大将は、女に住まいを用意したので、子供の将来のためにも、京へ戻るように説得する。	右大将は、子に山を出て京へ行くことを勧め、それを母に伝える。猿が六、七匹連れ立って、山の植物を持つてくる。	帝が北野社に行幸する日に、右大将（若小君）が琴の音を聞いて、進んでいく。右大将は子に身の上の事情を聞く。	東国から四、五百人の武士達がきて、山を荒らした。父の遺言を思いだして、なん風の琴をかき鳴らすと山は静かになった。	うつほの周りを掃くと泉が湧いた。母は子に琴を教える。熊・狼・猿が琴の音に感激して木の実を持つてくる。（資料館本に琴は描かれない）
●	●		●			●				●

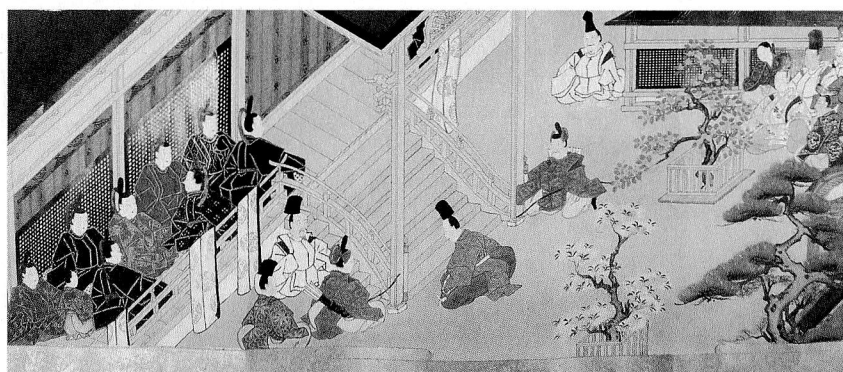


図1 巻一 (一)

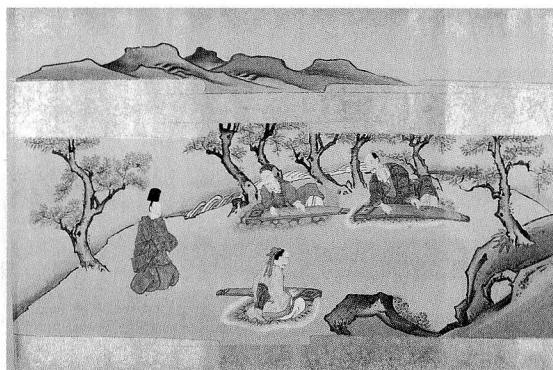


図2 巻一 (二)



図3 巻一 (三)



图4 卷一 (四)

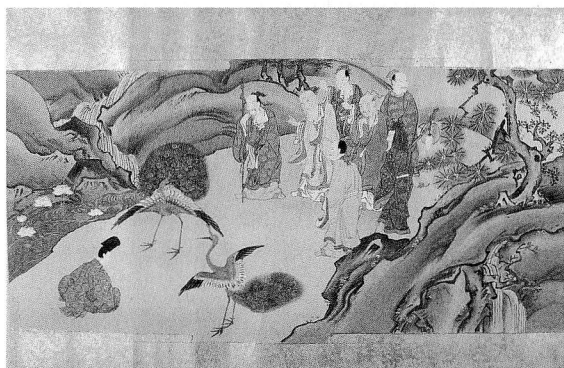


图5 卷一 (五)

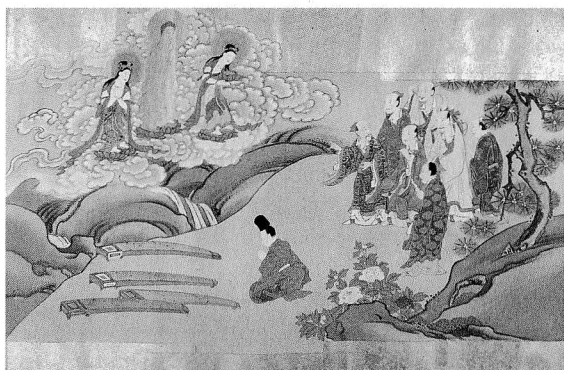


图6 卷一 (六)



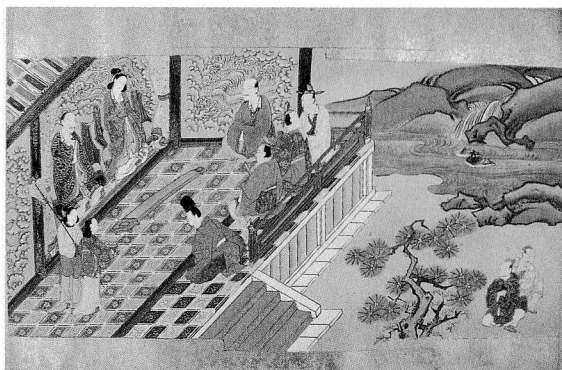


図7 巻二 (一)

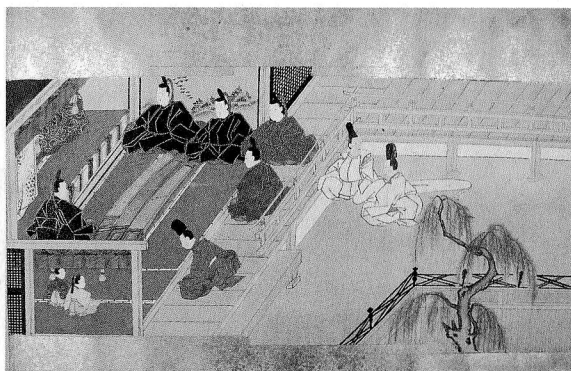


図8 巻二 (二)

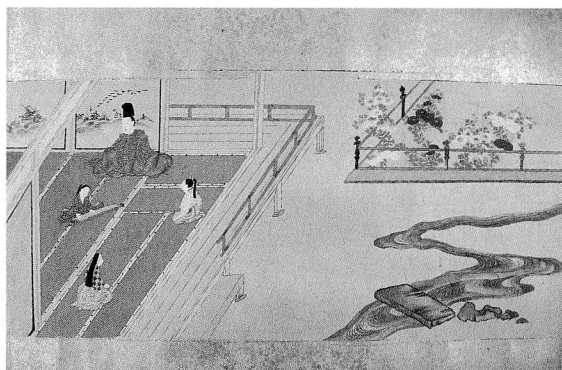


図9 巻二 (三)

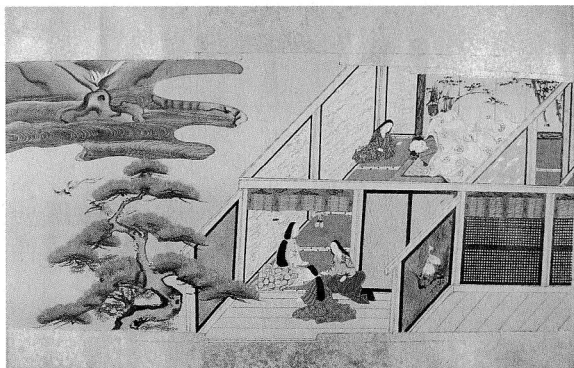


图10 卷二 (四)



图11 卷二 (五)

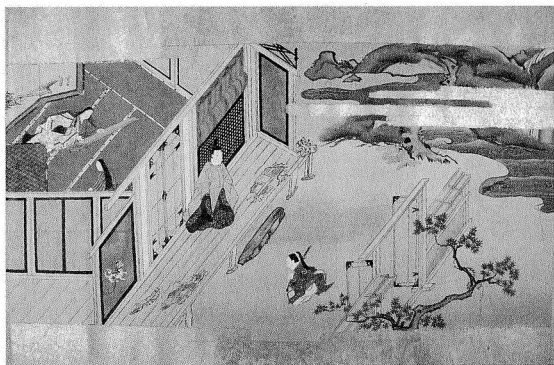


图12 卷二 (六)

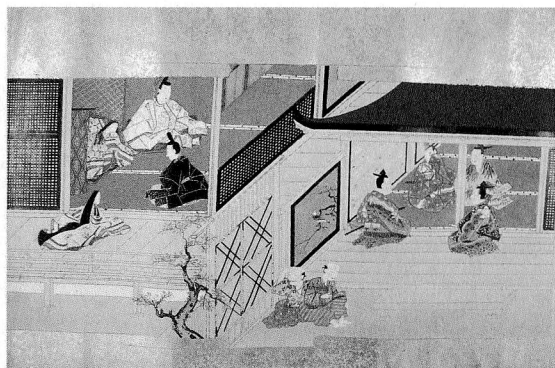


図13 卷三（一）

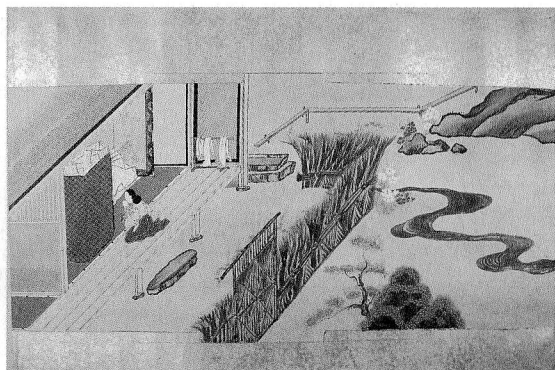


図14 卷三（二）

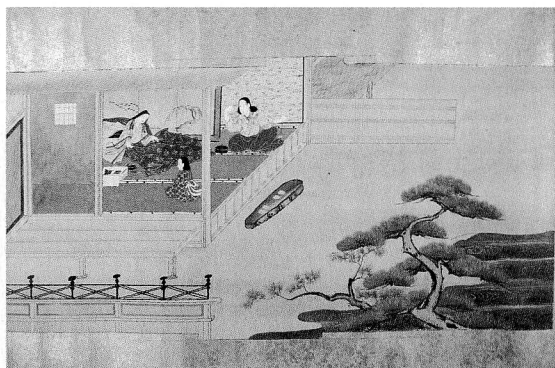


図15 卷三（三）

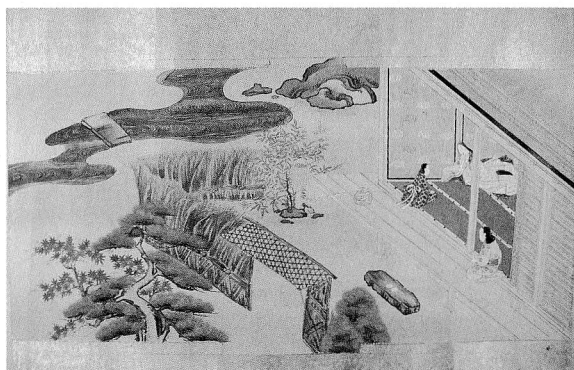


图16 卷三 (四)



图17 卷三 (五)



图18 卷三 (六)



図19 巻四（一）

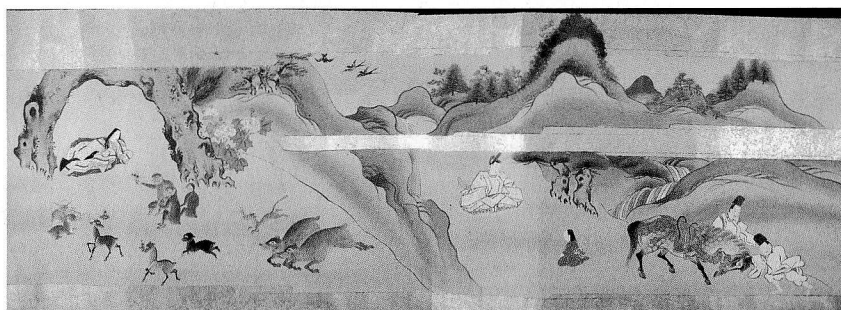


図20 巻四（二）

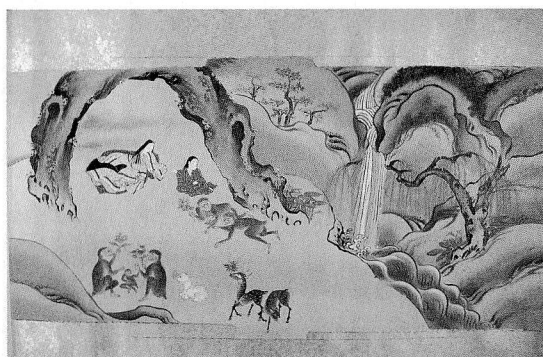


図21 巻四（三）



图22 卷四 (四)

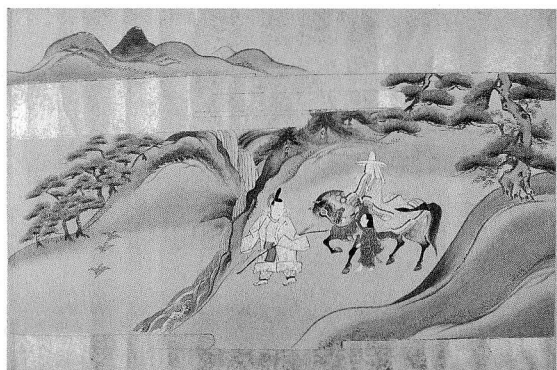


图23 卷四 (五)

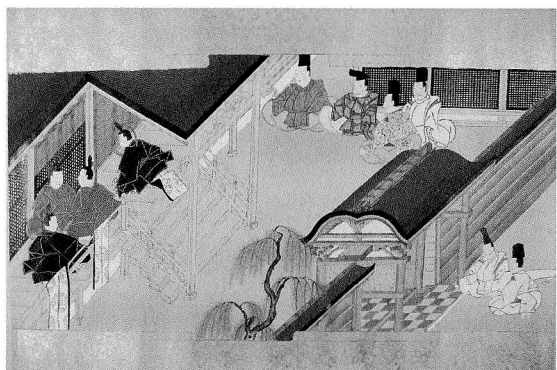


图24 卷五 (一)

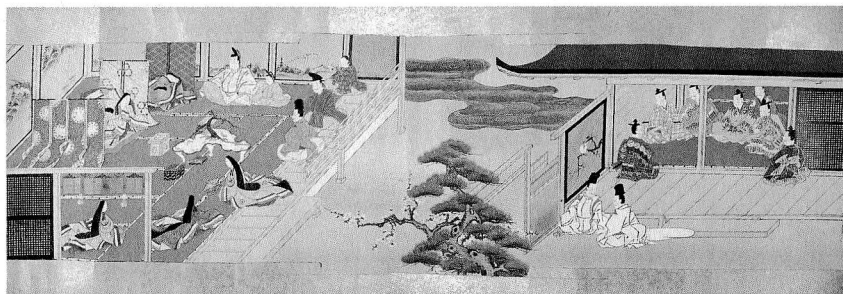


図25 巻五 (二)

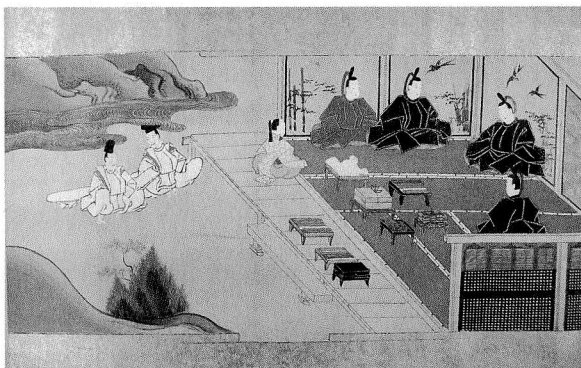


図26 巻五 (三)

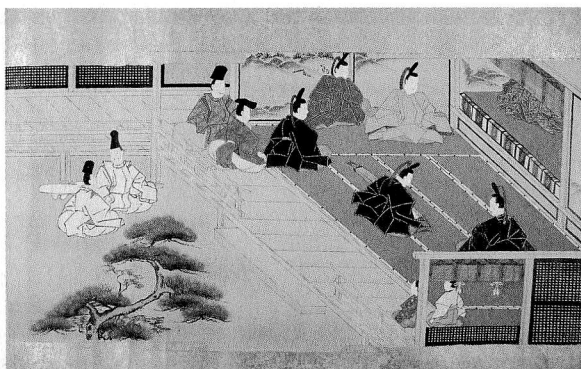


図27 巻五 (四)



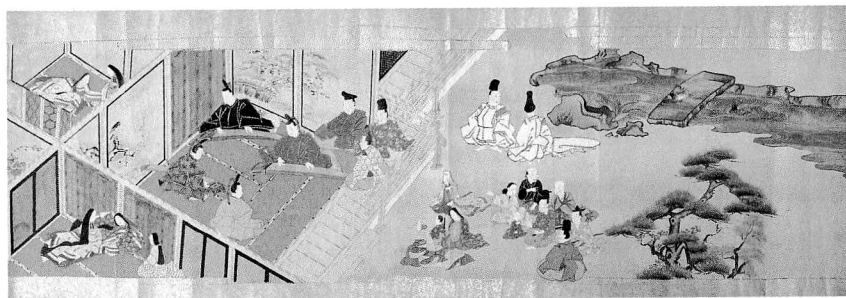


図28 巻五 (五)

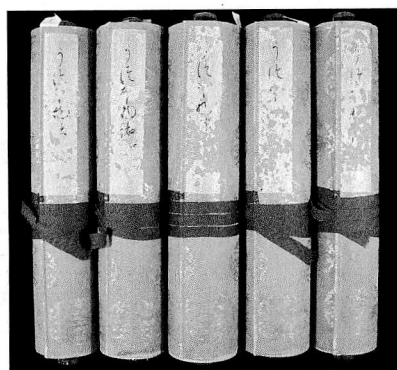


図29 絵巻全体

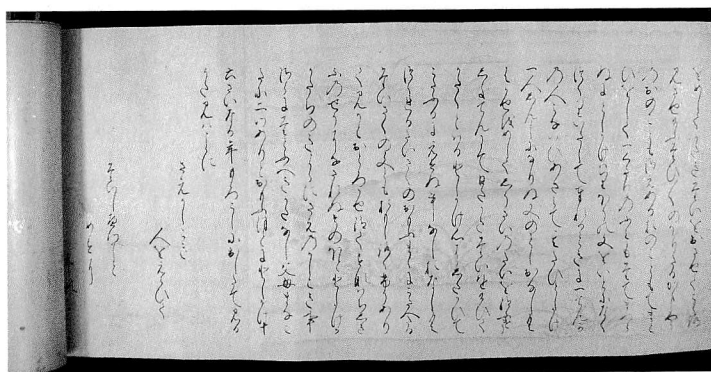


図30 詞書